

避難生活の苦勞 県境越え

福島的女性と共同製作



共同製作したバッグの完成を喜ぶ齋藤さん（左）と牧子さん（右）ら＝仙台市青葉区で

巾着バッグ「世界に見せる」

仮設住宅で暮らす宮城、福島両県の女性たちが、国連防災世界会議に合わせてカゴの付いた巾着バッグを共同製作し、仙台市青葉区の商業施設「エスパル仙台」の本館1階で展示している。女性たちは「避難生活を送るなか、県境を越えて一緒に生み出した作品を世界各国の人に見てもらえたら」とPRしている。

国連 防災会議

■支援物資使い
共同製作したのは、山元町などで被災し、仙台市若林区の仮設に住む女性でつくる「手作りくらぶ」のメンバーと、原発事故で福島県葛尾村から同県三春町の仮設に避難している女性たち。

福島県的女性たちは、仮設に閉じこもりがちになってしまつたのを防ぐため、2012年の冬頃から集会所で雑貨作りをスタート。その一つが支援物資として届いた紙製のひもを使ったカゴで、手編みで丁寧仕上げている。

そのカゴを昨秋、仙台市内で展示したところ、訪れた「手作りくらぶ」メンバーの齋藤志津子さん(49)の目に留まった。和紙や着物でブックカバーなどを作つて販売してきた齋藤さんは、故郷を離れた福島県的女性たちが支え合つて暮らしているを知り、「避難の理由は違つても、境遇は同じ」と感じたという。

齋藤さんは、カゴ作りを支援しているNPOを通じて製作者の一人の牧子良子さん(76)を紹介してもらい、三春町に足を運んで共同製作を打診。「手作りくらぶ」が着物の布地を縫い合わせて巾着バッグを作り、福島県的女性たちが手がけたカゴに入れることにした。底部が平らになることから、ペットボトルなどを巾着に入れても安定感を保てるのが利点という。

■感謝込めて
国連防災世界会議の参加者たちに見てもらうため、2月上旬に製作を開始。約1か月かけて、ピンクや紫色のカゴ付きバッグが6個完成した。

メンバーとともに16日、展示会場を訪れた牧子さんは「支援でもらった材料を使い、感謝の気持ちを込めて作った」と話した。齋藤さんは「県境を越えて、一つの物を作り上げた喜びは

防災や減災などの問題解決に取り組む若者の育成について考えるパブリック・フォーラムが16日、東北大川内萩ホール(仙台市青葉区)で開かれた。

国連教育・科学・文化機関(ユネスコ)は、地球規模の課

防災教育の 取り組み紹介

題を自分の問題として捉え、身が登壇し、生徒だけで避難所近などから取り組む人材の育成を進めている。震災を機に、防災や減災も重要なテーマに位置づけられている。

日本ユネスコ国内委員会などが開いたフォーラムでは、気仙沼市立階上中学校の生徒が、上級生になると「教える」立場に変わること、知識が継承されていくと報告した。

2015年(平成27年)3月17日(火曜日)

言 壹 衆 斤 門

ひとしお。被災しても、前を向いて進んでいることを世界の人びとに知ってもらえたら」と期待している。

展示は18日までの午前10時～午後9時。バッグは縦約25センチ、横約18センチで、希望者には1個5000円(税込み)で販売する。